様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　７日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基礎研究（Ｂ）
研究期間：平成 21 年度～平成 24 年度
課題番号：21320163
研究課題名（和文）　工芸の生産・流通・消費とグローバリゼーション――新しい「工芸の人類学」の構想
研究課題名（英文）New Perspectives for Anthropology of Crafts:Production-Distribution-Consumption of Crafts in Globalized World
研究代表者
松井　健（MATSUI TAKESHI）
東京大学東洋文化研究所・教授
研究者番号：50109063

研究成果の概要（和文）：　世界各地、日本各地方の伝統的な工芸のあり方を具体的に把握し、これらの工芸の生産、流通、消費のあり方が、世界のグローバリゼーションとどのようにかかわっているのかを明らかにした。具体的には、機械による大量な安価な製品が流入するなかで、伝統的な工芸がどのように生き延びていくのか、あるいは新しい付加価値を付けて商品として別のカテゴリーに転位するのか、を手がかりにグローバル化する世界を分析した。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed to describe production, distribution and consumption of traditional crafts, mainly so-called hand-made, in the globalized world. Thereafter it analyzed the process of survival of traditional crafts under pressure of cheap and mass machine products, and on the contrary, another process of economic transposition of traditional crafts to luxurious articles. Results of this study, thus, contribute to find a clue to focus problems concerning globalization in a totally new perspective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
平成 22 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
平成 23 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
平成 24 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
総　計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：人類学
科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学
キーワード：工芸・グローバリゼーション・技術・生産・流通・伝統（性）・真正（性）・グローカル化

１．研究開始当初の背景

(1)　研究開始当初、海外の文化人類学研究者のなかには、工芸やモノを手がかりとする文化研究が少しではあったが企図されていた。日本においては、ほとんどおこなわれていなかった。研究の主流は、モノといえば物資文化の研究であり、博物館展示資料としての集収品の分類や機能の研究にかかわるものであった。

(2)　そうした背景のなかで、当研究は、まず、グローバリゼーションの中で、世界各地、また日本諸地域で、工芸がどのように生

産、流通、消費されているのかを具体的に把握しようとするものであった。

(3)　そのうえで、「工芸」を突破口として、現在のグローバル化する文化の状況の全体を記載するための方途を考え、新しい「工芸」の人類学というべきものを構想することができないだろうかという問題を設定した。

２．研究の目的

本研究はアジア、アフリカ、及び日本国内における、伝統的工芸（おもに手工業的に、小規模生産される）の生産と流通と消費の様相を明らかにし、そこから、グローバリゼーションが及ぼす影響を明らかにしようとするものである。これらの工芸をめぐる状況をとおして、かえって、グローバリゼーションの分析のための方途を考察し、これまで構想されたことのなかった、新しい工芸の人類学の基礎を提案するものである。

具体的には、各地の伝統工芸がどのような社会・経済状況のなかにあるのかを調査し、今日的なグローバリゼーションがそこに与える影響を明らかにする。中国を中心とする新興工業国からの安い機械による大量生産の日用品は明らかに伝統工芸の存続を脅かすものであるが、これに対抗するようにして、観光化のなかに伝統工芸が活路を見出したり、日用品から奢嗜品へと商品カテゴリーを移すこともある。かえって、このような事象は、グローバリゼーションの多面性をうきあがらせ、工芸を通して、グローバル化する世界のダイナミズムを把握する方途を示してくれることにもなる。さらに、文化多様性といいながら、伝統工芸がきわめて困難な経済的局面にあることから、そのエンパワーメントに役立つ知見を本研究から見出すことをめざしている。

以上のように、本研究は、工芸の生産・流通・消費のグローバル化についての基礎資料の集収、伝統工芸の現状からグローバリゼーションを分析するという理論的作業、さらには、今日の伝統工芸のエンパワーメントという実践の三つの側面をもっている。

３．研究の方法

(1)　研究年度ごとに、南アジア（ネパール）、東南アジア（タイ、インドネシア）、東アジア（韓国、台湾）そしてアフリカ（エチオピア）と日本各地（沖縄、九州、山陰、東北）について、フィールドワークをおこなって、各地の代表的な工芸の生産、流通、消費の現状と過去についての資料を集めた。

(2)　各地域の工芸について、主要な関与項目ごとに整理するファイリング作業をおこなった。グローバリゼーションに密接に関係する関与項目としては、①中国からの安価な大量生産工業製品の流入②伝統工芸品の地域外への移動にともなう付加価値の発生や商品カテゴリーの移行③観光の影響、の以上三つを設定した。

４．研究成果

(1)　対象地域の工芸の代表的なものについて、調査の時点での、生産、流通、消費について、具体的な記述資料を蓄積することができた。これは、何年、あるいは、何十年後の状況との比較の資料となる。

(2)　中国を中心とする工業化された国々からの、安価な大量機械製品の日用品に対して、各地の伝統工芸品の競合などのリアクションについて資料を集めた。この圧迫によって、多くの伝統工芸は生産を縮小したり、絶滅した。

(3)　しかし、伝統工芸品のなかには、このような圧迫に対して生産地から遠くに（ときには外国へ）商圏を移行して、あるいは商品としてのカテゴリーを変えて（たとえば、実用品から奢嗜品へ）生き延びたり、かえっ

て生産（あるいは売上）を増加させるものもあることが明らかになった。

（4）　観光客の多い地域においては、その地域を訪ねる観光客のために、伝統工芸が土産品化する状況がある。「伝統」の商品化のほか、その工芸の変化にもいくつかの特徴が見出された。本来その地方の伝統ではない輸入された工芸品が観光地で土産品として売られることもまれではない。

（5）　グローバリゼーションとグローバル化した地球規模の経済事象の分析のために、いずれもきわめて有効な手がかりと考えられる。とくに、(3) の経済的なニッチェのトランスポジションと付加価値については、本研究で明らかになったことが多いが、まだ、今後十分な研究をおこなうことが求められる。

（6）　以上の成果にたって、きわめてきびしい状況に直面している日本各地の伝統工芸のエンパワーメントについて提言することを目指したが、各地各品目ごとに、きわめて多様な要因が関与していて、容易に一般化することはできない。これに関しては、柳宗悦と民芸運動が、日本国内については、重要な意味をもっており、その歴史的な貢献を検討して、今日的意味を考える必要が感じられた。

（7）　経済的な転位とともに、工芸の商品としての「寿命」も大きな問題として浮上した。一般の商品がこわれたり、固有の機能を果たせなくなると廃棄されるのに対して、工芸品は、古くなって、その機能を失っても（たとえば、布が破れて断片になったり、道具がこわれて部品ごとにばらばらになっても）それが審美的に評価されて、新しく骨董や古美術品として商品化されうる。これは、工芸の商品としての特異な性質である。

（8）　以上のような工芸の商品としての特異性は、経済人類学の理論の枠を考えるときに示唆に富む情報であり、さらに調査を進めるために、新規に、この局面を研究するプロジェクトをおこなう必要が感じられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①松井　健、民藝の未来形―試論と提案（上）（下）、民藝、査読無、4,5 月号、2012、57－61,45－49

②松井　健、カーネリアンが結ぶ時空―インダス文明と南アジアの工芸の人類学、インダス・プロジェクト　ニュースレター、査読無、7 号、2010、8-12

〔学会発表〕（計１件）
①松井　健、民芸の未来形―試論と提案―、日本民芸協会（招待講演）、2012 年 09 月 02 日、倉敷市市民会館（岡山県）

〔図書〕（計３件）
①松井　健・琉球大学国際沖縄学研究所（編著）、琉球大学国際沖縄学研究所、先端的琉球・沖縄学の次世代研究者の育成・研究推進プロジェクト第２巻、2013、323-364

②松井　健・野林厚志・名和克郎（共編著）、国立民俗博物館、生業と生産の社会的布置、2012、239-268

③松井　健・窪田　幸子（共編著）、東京大学東洋文化研究所東洋学情報センター、アジア工芸の＜現在＞―工芸と人類学の基礎研究、2012、44-50

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松井　健（MATSUI TAKESHI）
東京大学東洋文化研究所・教授
研究者番号：50109063

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし